



第四章

獅子の芸術

The Alexis Empire chronicle

「アラン様が来てくださったことですし、夕食がてら作戦会議と参りましょうか？」

ちよほどよかったとばかり、シエーラが家人けじんに用意をお願いした。

レオナートはアランを客間に招き、三人で額をつき合わせる。

食事が運ばれるのを待つ間にも、アランは矢も楯たてもたまらぬ様子でシエーラに訊たずねた。

「軍師殿。僕はどうすればいい？」

「何はともあれ街道沿いに住む領民の皆さんへ、避難するよう告知するべきです」

シエーラはよどみなく即答した。

アランの妹・ミレイユが救援を求め、屋敷を訪ねてきたのが昼間のことだ。この軍師殿ぐんしだんからすれば、どのように戦いくさに臨むか考え、答えを組み立てる時間は充分すぎるほどにあった。

「……わかった。早急に手配する」アランは難しい顔でうなずいた。その措置は領民にとって、生まれた町や村を捨てるという命令に等しいのだと、正しく理解しているからだ。

「領民と押し問答している暇はないぞ？」

「わかってるよ、レオ。事が終わった後、免税措置や支援金を出して、彼らの生活が元通りになるまで保証すると僕の名で告げる。安心とまではいなくても、納得はしてくれるだろう」

アランは惜しげもなく言った。簡単にできることではない。貴族たちには領民など草木と変わらぬという感覚の者が多いのだ。「なぜオレがそこまでしなくてはいけない？」などと、平然と答えるのがむしろ普通だろう。

また、アランがこういう男だとシエーラも知っているので、敵に利用されないよう家を焼くうだとか、井戸に毒を投げようだとか、ある種の常套手段も口にしない。

それとは別種の気まずいお願いを、申し訳なさそうに言い出す。

「もつともつと、お金がかかっちゃってもいいですか？」

「もちろん、金なんかで平和が買えるなら望むところだよ」

「では、領民の皆さんの避難に当たって、家財を運び出すのを禁じ、最低限の食料だけを持って逃げるよう、指導してください。家畜を連れて逃げるのもダメです。馬だけは逃げるのに使えるので当然けっこうです。これらの措置によって失われたものも全て、後でちゃんと補償すると領民の皆さんにお約束して欲しいのです」

「約束はかまわないけど……それだとケインズどもが略奪し放題だ。奴らをみすみす調子に乗らせるのはどうだろう」

「敵兵の士気が上がりすぎるのはよくない」

レオナートもこれは口を挟むが、シエーラはいつそ見事なほどの笑顔で、

「乗らせてさしあげればいいじゃないですか。それより、領民の皆さんの命の方が大事です。」

欲張ってたくさん家財を持って逃げて、敵兵に追いつかれて、命も家財も奪われた……なんて話が歴史では、枚挙に暇がないんですのよ？」

「なるほど……」アランは素直に感じ入ったようだが、レオナートは別の感想を抱いた。シエーラの笑顔を見てみると、領民の安全確保以外の意図も感じられたのだ。

どんな思惑があるのか気になるが、話の腰を折る気はない。

「急いで早馬を出しましょう」とシエーラ。

アランが命令書をしたため、レオナートが家人を呼んで託す。帝都からエイドニアまでおよそ八十里弱（約三百キロメートル）。領地は南北に長く、真北に隣接したクリメリアから敵が攻めてくるとなると、北端の村まで最大百里ほど早馬を飛ばさなくてはいけない。クロード全土を網羅する駅伝制度を利用し、馬を替えながら急いでも、五日から八日かかる計算だ。

今日が三月三日で、クリメリア軍——否、シャルト軍か——が州都グリンデを進発するのが十三日予定。ならばエイドニア州境を侵すのは十五日辺りだろう。なんとか間に合う。

そう、一つ助かるのは、敵軍の大半がバイク兵だということだ。

柄の長さが三間（約五・六メートル）を超えるバイクは強力な武器であるが、あまりに長すぎ、重すぎ、携行に難がある。軍事訓練を受けていない農民を徴発し、持たせてみたら、一行軍中に音を上げて、勝手に柄を切って短くする者が続出したという逸話があるほどだ。

ゆえにバイク兵の行軍は遅く、彼らが州境を越えて侵略してくるまで猶予が生まれた。

「他に何をすればいいかな、シエーラ？」

「可能な限りの兵を、州都エイドロンに集めるべきです」

「わかった。……でも、民に武器を持たせて戦うのは避けたいんだが……？」

「アラン様は本当にお優しいですね。ええ、必要ないです。ぶっちゃけ役に立ちませんしね」  
大帝国時代よりクロードは兵農分離が徹底されている。

日々、訓練を積んだ常備兵の強さは凄まじく、いきなり複雑な武器を持たせた農民などでは太刀打ちできない。「鳥合の衆」という言葉があるが、そういう弱兵をいくらかき集めても、ものの足しにならないのだ。例外は日ごろから弓矢の扱いに習熟した狩人カウントたちくらいのもの。

先のアドモフとの戦でも最終的に州都へ立て籠もり、都の民の中には戦いを志願してくれる者も大勢いたが、矢や怪我人を運ぶなどの後方支援以外ではまるで役に立たなかった。

「エイドロンに兵を集めたとしてその後は？　まさか籠城戦か？」レオナートは訊ねた。

「すまないが、うちにはリントみたいな立派な石壁はない。堀と柵だけだ」

「街を戦火に巻き込みたくないですし、打って出るのがよろしいかと。ただ、せめて相手には疲労のピークで戦ってもらいましょう」とシエーラ。エイドロンは州南端部に位置し、その近郊まで敵軍にエイドニアを大縦断させる戦略である。

「残るは兵力差だな」

レオナートが一番頭の痛い問題を挙げると、アランが軍神アテネの加護を求めて名を唱える。

「そんなものに祈っても、ご利益などないぞ？」

伯母譲りの無神論者であるレオナートはびしやり。

こちらの戦力はアレクシス騎士隊の五百に、エイドニアの常備兵千人。

彼我戦力は、実に二倍差以上。

森林に覆われたアレクシスと違い、エイドニアは平野部の多い土地だ。守るに難い。

「生半なまなかにはいかん」

レオナートは厳しい現実を、厳しい声こゝろ音で突きつけた。

「ご懸念はもつともですが、大丈夫ですよ」

シエーラが得意そうな顔をした。

「良い策があるのだな、軍師殿？」

「だからそんな他人行儀な呼び方はやめてください。レオ様ってば、も〜〜う」

得意顔はどこへやら、シエーラが頬をふくらませた。

アランが堪たまらず顔を手で覆った。手の下には「痴話ちわゲンカは後でやってくれ」と書いてある。

「せっかくの美人が台無しだぜ、シエーラ。だから機嫌を直して早く策を教えてくださいな？」

「アラン様ったら口が上手いんですから」

シエーラは「レオ様の口から聞けたらなあ」という顔をしたが、レオナートは気づきもせず早く策を待ち続ける。

シェーラは嘆息一つ、表情を真剣なものに切り替えた。

「伝説伝承の力を使います」

ふむ、とレオナートは顎に手を当てる。

「自信ありげだな？」

「ございますとも。エイドニア一州救えなくて、どうしてこの国を救えるでしょうか？」

「道理」

この少女は本当に口が達者で、しばしば感心させられる。

そして、決して口だけの軍師殿ではないことを、レオナートは知っているのだ。



クロード歴二一年三月十五日。

第二皇子シャルトは、クリメリアとエイドニアの州境にある湖、その南岸部に來ていた。

ケインズら十名余りの伴を連れている。

グリーンデを進発した兵たちと、そこで合流する手はずだったのだ。

日差しも風もすこしやすい、春の街道をバイク兵たちがやってくる。

長い槍をそそり立たせ、長い列を作って歩くその様は遠目からは、世にもおぞましい大蛇とハリネズミの混合物の如き異形に見えた。

街道脇で馬上にて待つシャルトらの姿に、あちらも気づいて教騎が進み出る。

兵をここまで統率してきた、ディングウッドの騎士とその従者たちだ。

「お待ちせいたしました、殿下！」

騎士が急いで駆けつけると、従者たちともども馬から降りて跪く。

中肉中背の、狐のように目の細い騎士だった。歳も若いし、ヒョロヒョロしてとても強そうに見える。防具も革鎧のみで胸甲さえ着けていない。

しかも従者たちとときたらゴロツキと呼んで差支えがない、育ちの悪そうな連中だ。

ケインズなどあからさまに形相を歪める。「こんな胡散臭い奴らを送つてよこすとは、ディングウッド公にやる気はあるのか？」とその顔に書いてある。

しかしシャルトは、この狐目の騎士たちを侮らなかつた。

「遠路遙々ご苦労。一時間とズレなく兵を到着させるとは、卿らもやるな」

そう。精兵たちとはいえ、行軍に支障をきたしがちなバイク兵を、遙かディングウッド州から約束通りの日時に連れてきたその指揮手腕は、褒めるべきものがあつたからだ。

この後、部隊の指揮権はシャルトが預かることになっており、この狐目の騎士は軍監として

侍る。若いシャルトのためにディンクウッドが派遣した、お目付け役でありアドバイザーだ。

「さすが御祖父殿はよい騎士を付けてくれたものだ」

「ははーっ！ 帝国が誇る英才と誉れ高き、シャルト殿下のお褒めに預かるとは恐悦至極にございまするーっ」

「そう畏まらずともよい。それより卿の名を聞かせよ」

過剰にへりくだった物言いをする男に、シャルトは馬上から笑いかけた。

「トラームと申しまする」

狐目の騎士はあくまで平身低頭のまま名乗る。

憶えておく価値のある名だ。シャルトは脳裏に刻んでおく。

「では、これよりエイドニア成敗を開始する」

「ははーっ！ 我ら臣下一同、皇子殿下の御命の下、身を粉にして働く所存にございます！」

「よろしく頼むぞ」シャルトは鷹揚にうなずくと、悠然と馬首を巡らせる。

軍学校こそ六年通い、卒業しているが、本物の軍隊を率いるのはこれが初。

しかし誰にもそうは思わせないほどの風格が、シャルトには備わっていた。

シャルト軍の陣容を詳細にすると、まず中核をなすのがディンクウッド州から呼び寄せた、バイク兵部隊だ。バイクに習熟した兵を育成するのは金と期間がかかるが、さすが四公家に君

臨する一人であるディンクウッド公は、三千人もの数を貸してくれた。

それにクリメリアの兵が合流している。内訳は斥候等に使う軽騎兵が百、普通の槍で武装した歩兵が三百、志願狩人で構成される弓兵が二百。

以上、およそ三千五百人である。

総指揮官は言うまでもなく第二皇子シャルトだ。

ケインズが副官ということになるが、実はシャルトは何も信用していない。

それよりも、見るからに戦慣れた軍監のトラームを頼りにしていた。

エイドニアを叩き潰すには充分な陣容である。

ケインズなどはアランに城下の盟を誓わせ、財貨を劫掠するつもりでいる。そうなれば目障りな雑種とその騎士隊の資金源も断たれ、崩壊するしかない。一石二鳥と息巻いている。

そして、シャルト軍は街道を南下し、道々で村や宿場町を見つけては略奪の餌食とした。

最初、それらがもぬけの殻になっていた時には、兵たちが落胆した。

しかし、家財（特に金品）が丸々残っていることに気づくと、兵たちは狂喜し、競うように奪い尽くした。若い女をさらって猥褻を満たすアテこそ外れたが、どこからも不満は出ない。

家畜も馬を除いてみな置き去りにされていたので、思う存分に肉を食らう贅沢もできた。

「士気が高まるなら上々」とシャルトは兵どもの好きにさせた。

三日も経つころには略奪品を兵たちが持ちきれなくなって、奪った荷車に山と載せて運ぶこ

ととなった。村や宿場を一つ襲うごとに、荷車の数も増えていく。馬は残されていなかったの  
 が兵たちが交代で手押しするしかないのだが、それでも皆ほくほく顔。

三月十九日。夕刻。

前方に空村を見つけて、兵たちに略奪を許可しつつ、今夜はここで一泊する旨を命じる。  
 村長宅らしき一番立派な家を、シャルトの宿兼本堂と決める。

トララーメの従者らが暖炉や夕食の用意をし、シャルトとケインズが食堂で待っている間、  
 「行軍の足が落ちているようでございますが……」

トララーメが平身低頭、恐る恐るという様子でシャルトに報告してきた。

答えたのはケインズだ。置き去りになっていた酒で早や顔を赤らめ、からむように、

「ああん？ 何をやっているのだ、貴様らは!？」

「兵たちがたるんでおるわけではございませんぬ。荷車が増えすぎておるのが原因でして……」  
 トララーメはびくびくしながら報告を続ける。

「荷車を放棄しろと言うのか!? 馬鹿も休み休み申せ!」

「で、出すぎた真似を申し上げました……っ」

ケインズが怒号を飛ばし、トララーメは床に額をこすりつけて謝罪した。

「待て、ケインズ卿」それをシャルトは見答める。

ケインズは一発で震え上がって口をつぐみ、助かったトララーメが安堵する。

「よく報告してくれたな、トララーメ卿。これからも気がついたことは何でも言ってくれ。見落  
 としがあつて困るのは、他でもないこの私なのだからな」

「はーっ。殿下の仰せのままにーっ」

「して、実際問題の話、今日はどれくらい進めた?」

「二里半(約十キロメートル)というところでございましょうか」

「ふむ……。すると、州都に着くのが五、六日遅れる計算だな?」

「ええ、ええ。然様にございます」トララーメは揉み手で答える。

「それくらい遅れが出たところで、アランに大した準備はできぬと思うが。どうかかな?」

「はい、私も同じ意見でございます」トララーメは揉み手を続けた。

「東方眞帝国の名著に兵は神速を貴ぶとあるが、場合にによりけりだと私は思う。今回は士氣  
 を維持したまま、余裕を持って軍を進めるくらいでちょうどよいだろう。あまり急かして、ア  
 ランの兵と会敵した時にはみな疲れていたでは目も当てられん」

「然様で、然様で」

「アランが我らに勝つにはおよそ奇襲、伏兵に頼るしかないだろうが、それも我らが斥候を出  
 しつつ慎重に進軍すれば防げるのではないか?」

「全く以って仰る通りにございます」

「我々の方が数で圧倒しているのだから小細工は必要ない。足元をすくわれることだけを注意

すれば、自然と勝利が掌中に転がり込んでくるはずだ。……と、考えるのだが、私のやり方は教科書通りすぎると思うか、トララーメ卿？」

「定石こそが王道であるかと存じます。まさしく殿下に相応しい戦かと」

「卿にそう言われれば安心だな。では、荷車は放棄しない。ただし、トララーメ卿の懸念も配慮し、これ以上は増やさない。そう兵たちに伝えてくれ」

「はーっ。さすがの名采配、必ず下々まで漏らさず徹底いたしますっ」

問題が解決し、シャルトは満足してうなずいた。全てが順調だし、このトララーメというよく気がつく男がいれば、万に一つのみスを犯してしまうような事態も避けられるだろう。

指揮官としての役目を果たし、シャルトはようやく杯に口を付けた。

安くて不味い酒だったが、気分は悪くない。

ところが、だ。

シャルトの機嫌に水を差すような、やかましい足音が複数聞こえた。

交代で哨戒させているはずの斥候たちが、駆け足で帰ってきたのだ。

「半里ほど先に、避難民どもが野営をしているのを見つけました！」

と、それはもううれしげに叫ぶ。

「なに誠か！」ケインズまで喜色を浮かべ、席を鳴らして立ち上がった。

「逃げ遅れどもがいたというのか？」

「はい、殿下！ 馬鹿な奴らで荷車に家財を満載にしてやがるんですっ」

なるほど、とシャルトは了解した。アランは領民に着の身着のまま避難するよう命じたようであるが、中には欲の皮の突っ張った町や村があったというわけだ。

愚かも愚か、シャルトの兵らにとっては格好の餌食でしかない。皆、懐は十分に温まっているが、人の欲望とは際限のないもの。そろそろ血や情欲に飢えている頃合いだったのだ。

「行ってもよろしいですか、殿下？」

ケインズが逸る気持ちを抑えられぬ様子で、裁可を仰いでくる。

「遊んでくるのはかまわないさ。ただし、これ以上は荷車を増やさぬように」

「ありがたき幸せ！ —— オイ、行くぞ。貴様ら！」ケインズが豚のように肥えた腹を揺すりながら、喜び勇んで斥候たちを引き連れる。「ヒッヒ！ やつと女にありつけるぞ！」

この時を待ってましたと言わんばかりの舌なめずり。

下種極まりとはこのこと。

シャルトは横目に見送り、理解できぬと首を左右にした。

「こんな僻地に美しい娘などいるわけがなからうに。そう思わないか、トララーメ卿。」

醜女を抱くなど、シャルトならば頼まれても「免こうむるが。」

「はあ、殿下のお目に叶うような女はおらぬでしょうなあ」

諂い笑いをするトララーメ。シャルトとケインズの両方を立てた、如才ない返答だ。

「ふん……」シャルトは鼻を鳴らした。

遠くを見つめるようにして、これから餌食となる避難民らへ思いを馳せる。

ケインズは騎兵を率いて向かうだろう。無力な民は蹂躪されるだけ。老人も子どももみな切り刻まれる。若い女たちは組み敷かれ、暴力で言うことを聞かされ、死んだ方がマシな目に遭わされる。凄惨という言葉では、表しきれぬほどの地獄が待っているに違いない。

シャルトは思考を打ち切り、独白した。

「ケインズらのはしやぎすぎて、あまり疲れて帰らねばよいのだがな」

第二皇子たるシャルトは、民草如きがどうなるかと痛む胸など持ち合わせていなかった。

シャルトの前を辞したトラーマは、従者たちが調理している厨房へ向かった。

「お疲れ様でさあ、団長」

「団長はもうよせ」

差し出された鶏の腿を焙じたものに、手づかみでかぶりつく。

トラーマは元々、中くらの傭兵団を率いていた、若くして百戦錬磨という戦士であった。

父親も傭兵で、十三の歳にはもう稼業を手伝わされ、その倍の年になるまで続けたのだ。

トラーマは地味でコツコツしたことが得意で、目覚ましい大活躍をするタイプではなかったが、とにかく臭うというか、危機察知能力が水際立っている。

この時代、大きな戦争はほとんどないので、傭兵の稼業と言えば隊商の護衛や匪賊の退治などが主だ。トラーマは隊商の護衛を引き受ければ、野盗どもが待ち構えていそうな場所をいち早く察知して、絶対に通らせないかつたし、山賊退治ではどんなに地の利がなくても、あるいは深い森の中でも必ず伏兵を見破った。

ついたあだ名が、不可捕の狐。

古えの神話に出てくる狐の魔物で、何者にも捕まらない運命を持ち、人々を苦しめたという。傭兵稼業は生き残ってナンボ、五体満足でナンボ。

トラーマの危機察知能力は界限で有名になり、仲間にしてくれ、手下にしてくれという者がどんどん集まり、気づけば傭兵団長の座に取まっていたというわけである。

最近各地で匪賊の害が増えてきて、その鎮圧がいい飯のタネだったのだが、二年前にディンクウッド公に雇われた時、手際が公爵の目に留まって騎士にならないかと言われた。

願ったりの誘いであり、トラーマは傭兵から足を洗い、団は解散した。幹部たちだけは手元に残して従者とした。それがこの彼らだ。

「まったく貴族どもがいけすかねえ奴らなのはわかってましたが、帝族も変わりやしませんね」

「そりゃそうさ。連中はみんな同じ穴の貉。ただ二種類の人間しかない」

トラーマは指についた脂を舐めとりながら答える。

「と言いますと？」

「払いのいい旦那と、渋い旦那だけだ」

「違えねえ」従者たちが調理の手を止め、腹を抱えた。

「笑い事じゃないぞ？ ディンクウッド公は払いのいい方だ。しかもとびきりにな」

「……誠心誠意、お仕えしやす」

トララーメがぴしやりと言うつと、従者たちが居住まいを止す。わかればよかった。

「今回の仕事はほっちゃんたちのお守ですし、団長は特に気苦労が絶えんでしょ？」

「へこへこ下手に出て、なんでもハイハイ言っておけば平気さ。ほっちゃんたちもゴキゲンさ」

「うへえ。そんなに勝てるんでしょね、オレら？」

「あの豚野郎はしんどいが、皇子様は見どころがある。とりあえず従っておいて不安はない」

「はあ。意外な」

トララーメも実際、同感だった。

「帝都の軍学校を首席で卒業なされたオツムだそうだが、伊達じゃないらしい」

若いくせに腰が据わっていて、何事も判断が速い。

教科書通りのきらいがあるのが元傭兵のトララーメには鼻につくが、兵数で圧倒できている今回はそれこそが正解。貴族の若様が初陣で目立とうとして、型破りなことをしたがるケースを何度も見てきたが、そういう軽薄な愚かさとは無縁だとわかる。

何より、兵の士気を高め、維持することに心を砕いているのが、良い。

これも貴族の指揮官は、下々のことが全く見えてないことが多いのだ。実際に戦うのは将の作戦ではなく末端の兵たちであり、彼らの士気こそが往々にして勝敗を左右するというのに。

シャルトも別に下々の目線に立って、同じ気持ちになって理解しているわけではない。

ただ指揮官としてその重要性を知っているだけで、でもそれで充分。

「貴族しか通えん帝都の軍学校なんぞ、どんなところか想像もつかんがな。よほど優秀な先生がいらつしやるんだらうよ」

トララーメは素直に感心しておいた。風に聞く英才の噂は、皇子様に対するおべっかでもなんでもなかった。戦争経験のない温室育ちを大将として立てて、日陰に徹しつつ、完勝してこいとディンクウッド公に命じられた時はどうなることかと思っただが、全くの杞憂である。

この戦い、負ける要素が見当たらない。

戦場で半生を過ごした古強者のトララーメは、そう判断を下していた。



レオナートとシェーラは、州都エイドソンから南へ五里（約二十キロメートル）のところにある宿場町に逗留していた。

無論、遊んでいるわけではない。アレクシス騎士隊五百人が集結するのを待っているのだ。

彼らはただの旅人に扮し、移動も宿泊も各自バラバラに行っている。

騎士隊が戦力として加わったことを、シャルト軍に秘匿したいという戦術的判断だ。エイドンやその近郊はあちらの密偵が常に見張っているだろうこと想像に難くなく、充分に距離をとった場所で集結する必要があった。

逗留初日――

「わああ、素敵なお部屋ですよ、レオ様！」

大店の宿の、一番上階の部屋に飛び込んだシエーラがはしゃいだ。

「一緒に泊まったら新婚旅行気分を味わえるかも。ちらり」

「新夫のアテはあるのか？」

レオナートはさつきと隣の自分の部屋に入った。

荷物を下ろしていると背後に視線を感じ、振り返ると、

「もうっ。レオ様って本当に愛想ってものがないんですから！」

頬を膨らませ、出入り口の陰から恨めしげに睨んでいるシエーラの姿があった。

しかし実際問題、レオナートは悠長に構えている気にはなれない。

敵軍は今この時もエイドニア州を侵略しているのだ。

「レオ様ってば堅物ですよね……」とシエーラは不満げにした。「パウマンさんたちには二十日まで集合完了のことって言ってますし、アラン様に進めてもらってるもう、一つの策は準

備に時間がかかります。今の私たちには待つことしかできないんですから、羽根を伸ばしてもいいじゃないですか。士気は大事ですよ、士気は！」

「でさん。性分だ」

レオナートがきっぱり言うのと、シエーラは「がっかりです」とうなだれたが、食い下がりはしなかった。なんだかんだ素直な娘なのだ。

そして実際問題、シエーラが悠長に構えていた理由も少しはわかった。

レオナートは脳裏にエイドニアの地図を浮かべて、敵軍のエイドン到着を二十一日と予測していた。しかし、待ってみれば二十二日になってもまだ現れない。計算は大きく外れ、実際の敵軍の移動はかなり遅れていた。斥候の話によれば二十日の時点でもまだ、北境からエイドンへ向かう街道の中間地点にいたという。

なぜ、こんなことになっているのか？

人目を忍んで情報交換をしにきたアランと、レオナートの部屋の中、三人で話を交えた。二十二日深夜のことである。

ランプの灯りに照らされたシエーラが、茶目つけたつぶりにウインクした。

「ただでさえ遅いバイク兵の部隊が略奪品を山と抱えれば、そりゃあ行軍も遅くなります」  
言われてレオナートは腑に落ちるばかりだった。

「領民に家財や金品を置いて避難するよう言ったのは、そのためか」

おかげで予定よりも五日以上、余分に準備をする時間が稼げた。

「ええ。それに、敵の行軍速度を遅らせる利点は他にもあります。例えば——」  
と、地図を広げるシエーラ。州都近郊を記したものだ。街の北には森があり、東へと広がる横長の形をしている。街道がそこを南北へ貫くように真っ直ぐ、最短距離で走っている。

「さて、敵軍はどこを通って攻めてくるでしょうか？ 街道を突っ切ってくれたら私たちも楽なのですが」

「兄上がそんな馬鹿な真似をするとは思えん」

他に全く選択肢がないならともかく、大軍の方が森の中の狭い道を通るなど愚の骨頂だ。

当然、森の西側を迂回するルートを選ぶはず。

「斥候の話によれば、現在敵軍の進行速度は日に二里半程度だとか。さて、アラン様？ 彼らがこの森を迂回すると、どれだけ時間がかかると思われますか？」

「それなら半日は余裕でかかるだろうな」

地元民であるアランの判断を聞き、レオナートは考え込む。

であれば敵軍は森の北西辺りで一旦行軍をやめ、野営をするはずだ。そうして明け方すぐに出発し、昼すぎ遅くに州都へ到着、そのまま攻撃を開始するはずをとるだろう。

一泊せずに半端な時間から迂回を始めれば、エイドンに辿り着く少し手前で夜が来てしまふ。そんな目と鼻の先で野営をすれば、こちらに夜襲をかけてくださいと言っているようなもの。

これまたシャルトなら、そんな愚策はとらないだろう。

「ね。おわかりでしょう？」

レオナートが思案する様子を、含み笑いで眺めていたシエーラが言う。

地図の一点——森の北西を指差して、

「敵軍の速度を遅らせた結果、彼らがここで一泊するのが予測できます。……いえ、ここで一泊するよう誘導させたのです」

「なるほどなあ」とアランが唸った。「でも、そうすることで何かいいことがあるのかい？」

「わからないなら感心するな」

「話の流れから察しただけじゃないか、レオ。そういうおまえはわかっているのかよ？」

「おおよそはな」

「おおよそで威張るなよ！」

「む。おまえこそ子どもみたいな揚げ足をとるな」

「子どもみたいで悪かったな。ジジむさいレオよりはマシさ」アランは悪態つくくとシエーラに目をやり、「まだ十八なのに無口で陰気で分別臭くていつも仏頂面の男、女から見とこうよ？」

「えっ？ 素敵だと思えますけど？」シエーラはきょとんとして答えた。

「シエーラに聞いたのが間違いだつたよ」アランは犬でも食えないようなものを見た顔で、げんなりとそっぽを向いた。

レオナートは咳払いをし、折れた話の腰を元に戻す。「シエーラの胸中はおおよそわかった」おおよそのところを強調的に声に出してしまったのは、我ながら子どもっぽいと気づいて反省しつつ、「しかしその戦法を使うには、いくつか問題があると思うが？」

「でしたら一つ一つ解決するまでのこと」

シエーラはこともなげに言った。

「伝説伝承を使って？」

「伝説伝承も使ってます」

レオナートがもしやと確認し、シエーラがえへんと胸を張る。

「そろそろ種明かしをいたしましょう。ダリア姐さんも来てくれるころです」

如何にしてシャルト軍を打ち破るのか、その策を最初から順に説明していった。

あまりに型破りというか、破天荒な策だった。

ゆえにレオナートとアランは最初、むつかしい顔で聞いていた。

しかし——シエーラが全て話し終えた時、二人ともにまさに破顔一笑していたのだった。



二十四日午後。シャルト軍は州都の北、二里（約八キロメートル）のところまで迫り着いた。行く手を森に阻まれ、予定通り西側へ迂回する。このまま街道に沿って森を抜ければ、目指すエイドンはすぐそこなのだが、シャルトは大軍を隘路あいろに入れる愚を犯さない。

兵の数を活かすためには、陣を横に広げなければ駄目なのだ。

狭い森の中ではそれができず、折角の兵力差が無意味になる。敵を利するだけになる。

また、エイドンに近すぎる場所で野営するわけにはいかないから、森の北西辺りに来たところ、日が高いうちにもう行軍を停止させる予定だった。

「圧倒的優位にある我々にとって、焦りこそが大敵である。明日、悠々と進軍を開始すればいい。違うか、トラーム卿？」

「いいえ、仰る通りかと」トラームは内心、舌を巻きつつそう答えた。

貴族といえどワガママ放題育てられたせいも、我慢の利かない者が多い。実際、シャルトの隣にいるケインズの顔色を窺えば、「州都は目と鼻の先なのに」とばかり不満たらたらだ。

しかしこの皇子様は軍を率いて最初から最後まで、徹頭徹尾、余裕の態を崩さなかった。

「憶えておけ、ケインズ卿。戦場において最も辛抱強い者、粘り強い者、それを古えの昔より名將というのだ」

二十三の若造であるはずのシャルトが沈黙ちんもくに道理を論ずる。

王者の風格とはこういうものかと、トラームは思う。

それはそれとして、自分の役目は全うしなくてはいけない。

「ただ、殿下。少し懸念もございまして……」

「なんだ？ 遠慮せず申せ」

「エイドニア伯がここまで本当に一切の妨害をしてこなかったのが気になります。何か企んでいるのではないかと……」

横からケインズがせせら笑った。

「アランのことだ、してこなかったのではなく、できなかったのではないか？」

一方、シャルトは落ち着き払った口調で、常識論を唱える。

「奴らからすればこの大軍を相手にするのだ。州都に亀の如く引き籠るしかあるまい？」

トララーメはまだ腑に落ちない。

「引き籠ったところで、連中は絶対に勝てませぬ。……そうでありましょうか？」

防壁を持たないあの州都の造りでは、この兵力差はひっくり返せない。

一般に守る側の方が有利とされるのは、敵の進軍線上でいろいろと妨害するのが容易であるからだ（つまりロザリアが対アドモフ戦で当初やった、積極的防衛策だ）。完全に引き籠るだけで有利なのは、堅固な城塞がある時だけ。

また、ディンクウッド公爵を敵に回してまで、アランに味方する貴族がいるとも思えない。援軍なき籠城などそれこそ自殺行為。

まして今あの州都の中には、一万を超す避難民がいる。シャルトは無理に攻め落とさずとも、包囲しているだけで楽々兵糧攻めができる。というかその前に、住民と避難民の軋轢でストレスが溜まり、簡単に暴動が起きるだろう。

「必勝を期して私がお膳立てしてきたのだから、当然であろう？」

シャルトもそれがわかっていいるから、馬上で胸を張る。

「決して言葉遊びのつもりはないのですが……。絶対に勝てないはずの連中が今まで何も手を打ってこなかった……。そのこと自体が私には気味が悪くてしょうがないのです」

しかしトララーメは食い下がった。

歴戦の戦士の勘が、不可捕の狐の本領が、理屈ではない警鐘を鳴らしていた。

「あいつらが無能なだけであろうが！ 勝手に敵を持ち上げて、杞憂で震える阿呆がいるか！」

ケインズが臆病者めとばかりに罵ってくる。

この豚に何を言われようと、トララーメは別に腹も立てないけれど。

「……それならよいのですが」

感覚的なものを言葉では説明できず、口を濁してもう黙り込む。

シャルトが何か言おうとした。が、その前に、先行して森の様子を調べさせていた斥候たちが帰ってきた。「伏兵や罠の類は見当たりませんでした！」

「よし。この辺りでいいだろう。進軍やめ。野営の準備をしろ」

シャルトが命じ、ケインズとトラーマの従者たちが指揮のために散っていく。

立て続けに、エイドンへ潜入させていた密偵の一人が報告にやってくる。

「どのような様子になっているか？」シャルトが直言を許し、馬上から諮問<sup>しもん</sup>。

「はっ。エイドニア伯が連日、民の前に出て安心を訴えておりますが、それで士気が上がった気配はありません。兵も同様です。何しろ避難民の数が多すぎて、連中の不安がすっかり周りに伝播<sup>でんぱ</sup>しております」

「領民如きに安っぽい情をかけるからそうなる。で、これまでに援軍の類が入った形跡は？」

「ございません」

「アレクシス騎士隊もか？ レオナートの奴め、存外に薄情な男だな」

「ヒハハハ、これだから雑種は！ 帝族の誇りなどとは無縁なのでしょう」

シャルトが薄くせせら笑い、ケインズが下品に腹を揺すった。

「……ただ、殿下。一つ気になることが」

「申せ」

「避難民が連れて逃げてきた馬の数が数百頭にも登るのですが、兵たちが片っ端から接收し、街道を行ったり来たりと走らせて、乗馬訓練のような真似をここ何日も繰り返しているのです」

「ふむ。どう思う、トラーマ卿？」

「せっかく数百頭の馬が手に入ったことですし、騎兵をでっちあげようとしているのではない

かと愚考いたします」トラーマは呆れ交じりに答えた。

馬は臆病な生き物だ。ゆえに本来は戦場で役に立たない。それを長年かけて調教し、戦に慣らしたものを特に軍馬という。大変に高価で、庶民がおいそれと手を出すことはできないし、出す理由もない。ゆえに避難民らが有していたのは軍馬でありえず、そんなものを何百頭接收しようが意味がない。

「どうも、エイドニア人どもは無能の方のようだぞ？」

シャルトの嘲笑<sup>ちょうしょう</sup>を、トラーマは否定できなかった。

それでもやはり、内側から込み上げる警鐘のような何かは鳴りやまなかったのだが。歯にとれないカスが挟まったような顔をしていると、シャルトが提案した。

「ならば、こうしようではないか。アランに残された策といえは、夜討ち朝駆けくらいのもんだろう。折角、馬も大量に手に入ったことだしな」

トラーマは相槌を打つ。その馬は戦場ではなんの役にも立たないのだが、アランは知らぬようになので、奇襲作戦に組み込むというのはいずれあり得る話だ。

「であれば我が軍はこれに対策する。まず、夜間の警備を倍に増やす。斥候もいつもの倍、交代で夜通し派遣し、敵が迂回してこないか森の西側を監視させる。街道側の方は心配要らない。夜の森に入る危険を冒す者はおらぬだろうから。それよりも迂回路側を重点的に警戒しておくのが効果的であろう」シャルトが淀みなく説明したのは、いい意味で教科書通り——まさ

にお手本ともいふべき対策案だった。「問題があれば指摘、補足をしてくれ。トララーメ卿」

「一点もごいませぬ」トララーメは深々と腰を折る。

「では、兵に伝えよ。明朝は日の出とともに出発することもな。夜襲があるなしにかかわらず、いよいよ戦だ。見張りの者を残し、早く、ゆっくり休め。酒も一杯までなら許可する」

「はーっ」トララーメは畏まって承り、伝令のために御前を辞した。

狐のように目が細い人相のため、普通にしているも笑顔に見られる。

だが今、眉根がはっきりと寄っていた。

シャルトに一切の落ち度はなく、トララーメとて頭は「勝ち戦」だと考えているのに。

不可捕の狐テウメックスの肌はわずかに粟あわだ立っていた。

(少し、考えておくか……)

自分の命を何度も救ったその勘を疎おろそかにしない。トララーメはそういう男なのだ。



同二十四日。午後二十二時。

レオナートは宿場の町長宅を借り受け、バウマンら麾下きかの騎士総員を招集した。

玄関ホールは二階部分まで吹き抜け構造になっており、天井こそ高いが、五百人も一堂に会

すとさすがに狭い。肩と肩が触れ合う。

一階と中二階の木窓は全て閉ざされ、四方の壁に点々とかけられた燭台しよくたいだけが頼り。

薄闇が、こんな夜更けにいきなり呼ばれた騎士たちの戸惑いを、助長するかのようだった。

レオナートは中二階から見下ろすのではなく、彼らと同じ場所に立つ。シェーラも隣にいる。

「こんな夜更けに、何用でございますか？」

バウマンが一同を代表して訊ねた。

レオナートはすぐに答えず、深く息を吸った。

そして、決然と告げる。

「これより夜襲をかける」

静かな声だったが、効果は観面てきめん。

たちまち場は騒然となった。

二倍の兵力を相手に勝つためには、奇襲作戦を用いるしかない。

そして、夜襲が成功するか否かの肝心かんじん要は、敵軍の位置を完璧に把握することだ。

この点において、今回はシェーラがシャルト軍の進行速度を遅滞させることで、野営地を特

定どころか誘導した。トララーメは「なぜ有利な防衛側が、進軍線上で妨害をしかけてこなかっ

たのか？」と訝いぶしんでいたが、彼の全く想像も及びつかない——つまり次元が一つ上の視野、

構想でシェーラはきつちりとちよっつかいをかけていたわけである。

その辺りの事情は省いて、シェーラが畳みかけるように説明を引き継ぐ。

「エイドニア兵は使わず、皆さんだけで行っても構いません」

「……某らだけなのはよろしくないが」

「この宿場からとなりますと、距離が遠すぎませぬか？」

「馬が疲れては、騎兵突撃も何も……」

「あちこちから懸念の声が上がったが、

「大丈夫です」シェーラは太鼓判を捺す。「エイドンに替え馬を用意してあります」

「五百人分の替え馬でござるか？ それほど大量にどこから……」

「申し訳ないですが、アラン様にお願ひして避難民たちから接収しました」

「おお……」納得の嘆息があちこちから聞こえ、どよめきとなる。

ここまで作戦説明が順調に進むのはわかっていた。

問題は次だ。シェーラが目配せをしてくる。

レオナートはもう一度、深く息を吸った。

今度は声を張り上げた。

「そして、森の中の街道を突っ切り、シャルト軍の背面を襲う！」

効果は靦面どころではなかった。

たちまち場は騎士たちの悲鳴で満ち溢れたのだ。

「夜の森へ入るなどと、正気の沙汰ではありませんよっ」

誰かが叫んだ。声がもう完全に裏返ってしまっている。

然り、然り、と賛同を唱える者が次々と現れる。

「オレの爺様が言っていた……。夜の森には美しい女の姿をした鬼がいて——」

「私の郷では、人魂が出て暗い池の中に誘い込むと——」

「その森じゃあ、赤子の泣き真似をする虎の魔物が棲んでいるらしい——」

「朝になって皆で捜索しに行ったんだ。そうしたら、その子の服と散乱した骨が——」

騎士たちが蒼礎めながら、夜の森に立ち入る危険を必死に説く。

彼らの故郷、あるいはかつての任地、いろんな土地の、いろんな魔物や、悪霊——それら

にまつわる民間伝承がそれぞれの口から語られる。

(……始まったぞ) レオナートは腕組みした。

ちよつとやそつとで取まりがつきそうにない、騎士たちの顔を見回した。

こうなることは最初からわかっていた。この時代、この大陸の人間にとって、夜の森に入ることは禁忌に等しい恐怖を覚えさせるものなのだ。

「お考え直しくだされ、殿下……。我ら一同、戦で命を落とすことは全く怖くありません。名誉です。本懐です。しかし、わけのわからぬ怪物に襲われて、生きたまま食われるなど、想像しただけで怖ろしい。まさに犬死にはござらんか……」

勇敢なパウマンですら、そう訴える始末である。

「実は、一昨日にも同じことが起きた。」

宿の一室でシエーラが地図を広げ、作戦の全貌を語った時だ。

傾聴するレオナートとアランの前で、彼女は地図の上を一直線になぞってみせた。

「この森を抜けて、夜襲をしかけます」

「ま、待てっ。そりやマズいっ」すぐさま制止をかけたのはアランである。

「何が問題でしょうか？」

「この森には大昔から言い伝えがあるんだよ。夜になると、見上げるような毛むくじやらの巨人が徘徊するんだって。人間を捕まえて頭からかじる、すごく怖ろしい奴さ」

まるで実際にその巨人を見たかのように、アランは震え上がっていた。

「作り話だろう」とレオナートが一言で切って捨てても、激しくかぶりを振るばかり。

「乳母から聞いたんだ。祖父さんが昔、むごい実験をしたらしい。昼間のうちに木の枝へ首輪の鍵を引っかけて、日が沈んだ後に森までとつてくるよう使用人へ命じたんだ。病気の娘の薬代を欲しがっていたその男は、それで医者に診せてやるって祖父さんに言われて従わざるを得なかった。結果、どうなったと思う？」

「可哀想に。帰ってこなかったのでしょうか？」

話の内容に気分を悪くした顔でシエーラが答えた。

「そうさ！ 翌朝、人手を使って搜索に行ったら、その男の無残な死体が転がってた。食い散らかされて目印の首輪を着けただけの、一人分の骨が残ってたんだとさ！」

「どうだ、恐れおののけとばかりの語調で、アランがまくし立てる。」

「狼の群れに襲われただけです」シエーラは断定した。

「君は現場を見ていないから、そんな——」

「でも、アラン様も見てらっしゃらないのでしょうか？」

「ぐむっ……。そ、それはそうだけど」

「俺も狼だと思っぞ？」

「チクシヨウおまえらよってたかって！ 仲良しかつ」

レオナートとシエーラに左右から同じことを言われ、アランは腐る。

別に少女の肩を持ったわけではなくて、この世に神や悪魔や魔物が——恐らく——実在しないことは、開明的な学問の師でもあったロザリアに、幼いころから徹底的に学んだことだ。

「私も魔物なんて実在しないと考えます」同じくロザリアの愛弟子であるシエーラが持論を語る。「しかし、夜の森に入ったら魔物に襲われる、悪霊に誑かされる——こういう話は形こそ変われど、大陸全土に偏在しているのです」

「ほう。大陸全土に？」

レオナートは興味を覚え、そつぽを向いていたアランもまた耳をそばだたせる。

「魔物なんかのせいではありませんが、夜の森が大変危険なことは事実です」

人間は大して夜目が利きかないし、方向感覚も鈍い。だから不用意に踏み込めば簡単に迷ってしまつて、出られなくなる。足元も暗いから、うっかり池に落ちて溺れることもある。一番怖いのは狼だ。狙われたらまず逃げられず、群れに襲われたらひとたりもいない。

「だから大昔から人々は『夜の森には入るな』と繰り返し戒めるのですが、ただ警句を唱えただけでは効果が弱いです。真面目に聞かない人が絶対にいます」

「だから魔物の作り話をして、怖がらせるわけか……」

「はい。作り話が綿々と受け継がれて言い伝えになつて、本来の理由や背景の記憶が風化して、『魔物が出るぞ』という迷信だけが残るのです」

「迷信」

「それもまた伝説伝承の側面です。目には見えないのに確かに人を動かす、無形の力です」

「ふうむ」レオナートは唸つた。蒙の啓けた彼にとつては腑に落ちる話だった。

「不用意に夜の森へ入るから危ないのであって、ちゃんと原因と対処法を知っていれば問題はないんです。実際、隊商とか旅芸人の一座とかの中には、平気で通つてる人たちもいますよ。

関所を通行するのに税金がかかりますから、夜のうちに街道を外れて、森の中をこつそり抜ければお役人に見つかからないでしょう？」

シエーラが最後、冗談めかしたがレオナートたちは笑わなかった。

アランが異議を唱える。「僕も頭じゃ理解できたよ。でも、誰もが誰もできるかな？ 最悪、

騎士隊の士気はガタガタだぜ？」

「確かに士気は問題だ」

戦においてそれがどれほど重要か、アドモフとの戦でレオナートは骨身に染みている。

あれだけ勇猛だったアレクシス兵たちが、食糧がなくなつた途端、弱兵に成り下がつたのだ。「どう考える？」レオナートは真っ直ぐな目をシエーラに向けた。

彼女が最初に地図を広げ、説明を始めた時、「夜襲作戦で行くのだろう」とレオナートには見当がついた。移動距離が長すぎる等、いくつか問題があると思つた。

最大の難問がこれだ。

幼少時から教え込まれた恐怖を、どうやって騎士たちの胸から拭い去るのか？

果たして——シエーラはいたずらっ子のような笑みを浮かべ、答えた。

「目には目を。歯には歯を。伝説伝承には伝説伝承を——」